

盛岡弁の研究 (三)

黒澤 勉
(岩手医科大学 教養部 文学)

A、「俳風盛岡ことば」より

はじめに

「毎年よ彼岸の入いりに寒いのは」という正岡子規の句がある。この句には「母の詞自ら句になりて」という前書きがついている。母の言った言葉がそのまま五七五の俳句のようになっていた、ということ、それをそのまま俳句としたわけである。私達は普段、話す時に五七五の音数律を意識して話すことはない。五七五と指折って言葉を連ねようとするのは俳句や短歌を作る時だけであろう。しかし、話された言葉がたまたま五七五になっていて、面白く感じられる、といったことは実際にありうるだろう。

逆に意識して会話を五七五にしたらどうなるか—たとえば詫びをいうのに盛岡弁で「おもさげね おもさげねども いってけで(申しわけありません。申しわけありませんが、行って下さい)」などと調子をつけて言ったら、相手は馬鹿にされたと思つて腹を立てるか、吹き出すか、いずれかであろう。

筆者は盛岡弁を調査し、それを週一回「盛岡ことば入門」というエッセイとして連載し始めて四年余りになる。ある時、盛岡弁に親しんでも

らう一つの方法として「俳風盛岡ことば」なるものを思いついた。そのきっかけとなったのは、知人から暑中見舞いを受け取った返事に、ふと思いついた盛岡弁で五七五を作ったことである。

もりおがも あつつくてすぼめで へつちよへでり

(盛岡も暑くてはじめじめして難儀しています)

これを初めとして、次々に五七五を作るようになった。句は面白いほどできる。私自身の経験、発想で作られたものもあるが、盛岡弁調査の過程の中で、人から聞いた話をもとに作ったものが多い。

盛岡弁は標準語よりも、はるかに五七五にしやすい。縮約した言葉が多いから標準語のようにダレないのである。促音や撥音が多いのも、リズムが生まれて面白い。また、盛岡弁で五七五を作るのは、俳句や短歌を作るより気楽で楽しい。日常のくだけた会話の一コマのような言葉だから、気楽なのは当然である。これを「俳風盛岡ことば」と名づけてみた。俳句でも川柳でもない、「俳風」の盛岡弁、というわけである。「俳」という漢字は「俳諧」などという言葉からわかるように、ユーモアを意味する。幾分おかしみの感ぜられる盛岡弁の五七五、という意味である。この「俳風盛岡ことば」を新聞や拙著『盛岡ことば入門』(信山社刊、

第四巻まで出版)に発表しているうちに、東京の藤田祐二郎さんとおつしやる方が、これに手書きの水彩画タッチの絵を添えて下さるようになった。大きさは葉書サイズで、一種の絵手紙の趣きもある。藤田さんは小中高校と盛岡に育ち、その後、東京で働き定年を迎え、現在六十五歳、私の「俳風盛岡ことば」から想像した場面を、パソコンに入力して、絵として描いて下さった。温かみのある、なつかしい場面と盛岡ことばがこうして結びついた。現在、百枚を越える作品が筆者のもとに寄せられており、その一部を新聞に発表したり、郵便局などで展示して市民に紹介したりしている。

以下、その一部をここに紹介するにあたって、その「俳風盛岡ことば」の意義について一言しておきたい。

(1) 「俳風盛岡ことば」は、一つの文芸的な創作である。今もなお、文語を使って俳句や短歌が作られているのであるから、減じかけている方言を使って創作するのも、一つの創作の手法である。発想や内容は個性が乏しく平凡であるかもしれないが、五七五にまとめる創作の喜びや享受の楽しみもないわけではない。(現に地元の新聞に連載中のこの五七五を切り抜いているという声を何度か耳にした。)

(2) この「俳風盛岡ことば」によって、盛岡弁を思い起こし、あるいは学習する素材を提供できる。「俳風盛岡ことば」は、前述したように自分の思いをまとめたものだけでなく、誰かが言った風の言葉、どこかで聞いた風の言葉を五七五の形でよみがえらせたものである。だからこれを読むと、耳元にその言葉が聞こえてくるような感じもするらしい。古い世代の人にとっては昔の暮らしと言葉をなつかしむきっかけになるし、若い、盛岡弁を知らない世代にとっては、盛岡弁がどのようなものかを楽しく学習できよう。

(3) 五七五にすることによって、減じかけている盛岡弁を記憶しやすく親しみ深いものとして定着できる。五七五にするのは、いわば一種の記憶法である。(但し、そのため幾分の無理もあるが、それはさ

ほどの問題ではないと思う)

(4) この「俳風盛岡ことば」を素材として解説をつけることによって、昔の生活や昔の人の心、日本語の歴史や変化など幅広い学習が可能となる。

(5) この「俳風盛岡ことば」を、各地の方言と比較することによって、興味深い方言、日本語研究ができる。筆者としては、日本各地の人がこの五七五を、それぞれの言葉に「翻訳」してもらえたら、と願っている。

以下、具体的に「俳風盛岡ことば」を紹介し、それについて解説を加えてみよう。

一、ばぐるーの ふてえはらがげ さつあめえでだ

(標準語訳) ばくろうの太い腹掛けから、札束が見えている。

(解説) ばくろうは農家の人から見ると一種の「山師」であり、きつぷのいい、派手な性格の人が多く、大金をこれ見よがしに見せびらかしている風もあった。

(語注) ○ばぐるーはばくろう。馬や牛の売買(その仲買)を業とする人のこと。馬産地盛岡には多くの「ばくろう」がいた。地名として「馬町」がありセリ市を行った「馬検場」の名残りもある。「ばくろう」という言葉は「伯楽」(漢語で馬の良し悪しを見分ける人の意)が変化した言葉といわれるが「馬喰」「博労」などの漢字が当てられることもある。乗馬ズボンに、半纏、腹掛けをして太り気味の人が多かったという。

○ふてえは「ふとい」はゆっくり発音すると、「ふてえ」、普通は「ふて」と発音される。「ふと」は「ふと」の二重母音の「o」が自然な、滑らかな形で変化して「と」なり、単母音化する。

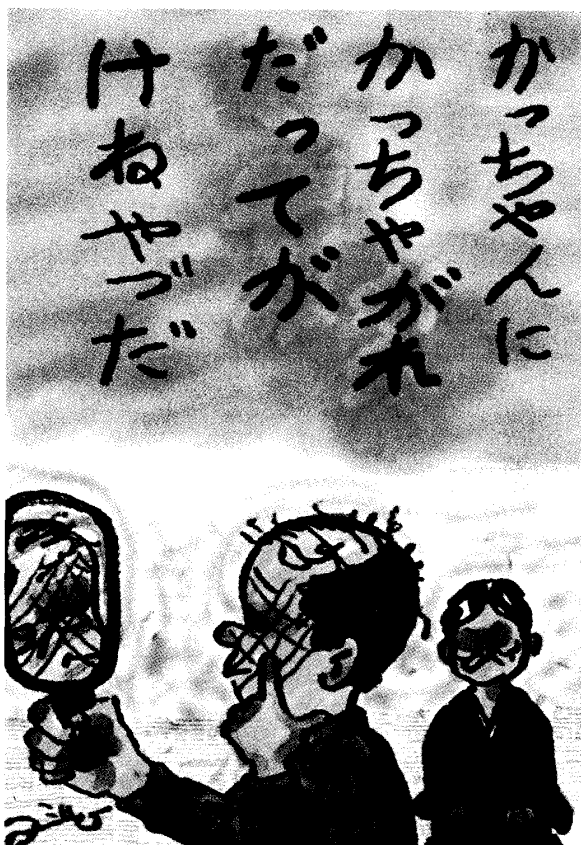
○はらがげは「腹掛」の訛り。職人などが法被の下に着るもの。紺本綿で造り、前面下部に「どんぶり」(ポケット)をつける。そこに札束などを無造作につっこみ、いかにも金がありげに見せたりした。



1



3



2



10



9



12



11



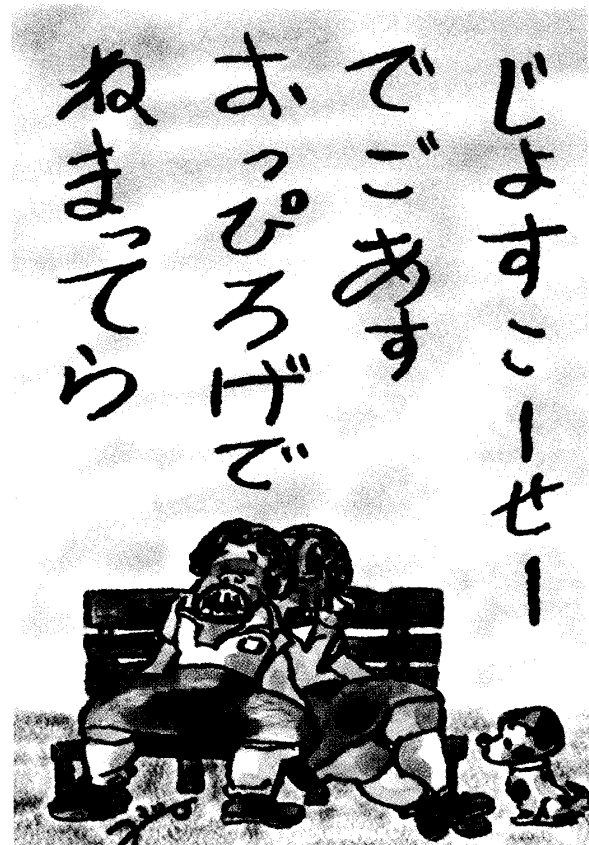
13



12



15



14

○さつあゝ「さつが」の変化で、格助詞の「が」や係助詞の「は」は、子音⁹、¹⁰が消えて、¹¹という母音だけが軽く残り、ここにアクセントが置かれて高くなる。これは独立した一拍をなさず、上の語と結びついて一拍と考えられる。

○めえでだゝ「みえていた」の訛り。標準語なら「みえている」と言うが、盛岡弁では過去形のように表現する。たとえば「いえに（家に）いる（居る）」というの「えさ、いだ」のように「いだ」「いた」の訛りを使う。この場合の「だ」は過去というより、継続（ゝている）の意味である。「た」「だ」は、古語の完了の助動詞「たり」の「り」が脱落して残ったものであろう。「たり」は「てあり」が縮約した言葉で、「ゝ（し）ている」という存続の意味だから、その古語の用法に近いと思われる。

二、かっちゃんに かっちゃんがだつてが けねやづだ

（標準語訳）母さんに、ひっかかれたつていうのか。意気地のない奴だ。
（解説）「かかあ天下にからつ風」といわれるのは上州である。盛岡ではそうした伝統(?)はなく、戦前においては、封建的な男女差別も強かった。従って、この句は現代的といえるかもしれない。それにしても、女性が強いということが笑いを呼びおこすのはどうしてだろう。

（語注）○かっちゃんゝ「かあさん」の訛り。「かがさま」「かが」などとも言ふ。同様にして「父さん」は「とっちゃん」「とど」「とどさま」などと言う。「おじいさん」は「じっちゃん」「じさま」、「おばあさん」は「ばっちゃん」「ばさま」などと言う。夫が自分の妻を呼ぶのに「かあさん」などと呼ぶのは、日本語の面白いところで、夫婦が互いに「とうさん」「かあさん」などと呼びあっているのは、考えてみれば滑稽である。その呼び方を第三者がそのまま使って「あなたの奥さん」の意味で、「かあさん」（盛岡弁で「かっちゃん」などと言うのである。ただし気を使う相手なら一般に「奥様」「奥さん」などと敬称を使う）。

○かっちゃんやぐゝ「ひっかく」の盛岡弁。「かき裂く」が変化した言葉。似た言葉として「ぶっちゃんやぐ」は「ぶち裂く」の変化で、いずれも接頭語の「かき（掻き）」「ぶち（打ち）」が促音化（ゝになる）し、それに伴って「さく」が「ちゃんやぐ」となった。

○ゝてがゝゝゝていうのか（盛岡弁で「ゝてそうのが」「ゝてへるのが」の縮約形。「ゝて言うのか」の意）。たとえば「わがねつてが（だめだつて言うのか）」「んだてが（そうだつて言うのか）」「こねてが（来ないと言うのか）」などと言う。

○けねゝ「かいのない」の変化した言葉。意気地がない、ふがないことをいう。古語にも「かひなし」の語がある。「ききめがない」という意味もあるが（標準語の「かいがない」も同じ）弱々しい、いくじがない、という意味もあり、盛岡弁の「けね」はこの意味で使う。「かい¹²」の二重母音¹³が¹⁴となり「け」に、「ない¹⁵」の二重母音¹⁶も同じく¹⁷となつて「ね」となる。この「ね」はきわめて重要な頻繁に使われる打消の語で、たとえば「いがね（行かない）」「そわね（言わない）」「ねね（寝ない）」などと言う。

三、すけでける しとりでくさととりあ ゆるぐねえ

（標準語訳）手伝ってくれ。一人で草取りするのは大変だから。

（解説）「ゆいっこ」という言葉が示すように、かつては相互に労力を提供して助け合うことが盛んに行われていた。「すけでける」という言葉は、おそらく現代人よりもはるかに多く使ったものではなからうか。それだけ親族や地域共同体の絆が強かったのである。

（語注）○すけでけるゝ手伝ってくれ。「すけで」（「すける」の連用形「すけで」＋「ける」（「ける」の命令形）。何か手伝ってほしい時には、「すける」「すけでける」「すけでけで」「すけでけねが」「すけでけねがべが」（後の方ほど丁寧な頼み方になる）など状況に応じて使い分ける。○すけるゝ動詞「すく」の活用が「すけず・すけたり・すく・すくる時」。

すくれども・すけよ(う)」というカ行下二段活用から「すけず・すけたり・すける・すける時・すけれども・すける」という下一段活用に変化し、終止形も「すける」となった。手伝う、手を貸す、という意味。ちなみに標準語の「たすける」という動詞は「た(手)」に「すける」が付いた言葉である。

○けるⅡ「くれる kuren」の弾音^レが弱くなって消え(盛岡弁では^レが消える傾向がある)、二重母音^{ee}の^eが消えて「ける」となった。標準語でも動詞の下に「てくれ」「てくれ(よ)(ろ)」という形で依頼することもある(たとえば「買ってくれ」「起きてくれよ」のように)が、盛岡弁ではもつと気軽に「てける」「てけで」と依頼する。「手伝え(盛岡弁で「すける」と言えば命令形となり、相手に不快感をもたせることが多い。しかし「手伝ってくれ(盛岡弁で「すけでけろ」と言えば依頼形となって相手は受け入れ易くなる。命令形はよほど親しい間でなければ使えない表現である。

○しとりⅡ盛岡弁では「ひとり」が「しとり」となる傾向が強い。しかし、周辺の在では「ふとり」と発音する人もいる。

○ゆるぐねえⅡ「ゆるぐない」は、楽でない、ということ。「ゆるい」は、たるんでいて激しくない、いいかげんである、おっとりしている、などという意味である。「楽だ」という意味で「ゆるい」を使うことはないが、その否定形の「ゆるぐねえ」はよく使う。

四、えだわすな くされらがすた はあかれね

(標準語訳) もつたいないな。腐らせてしまった。もう食べられない。

(解説) 御馳走など、後で食べようと思ってとっておいたところが、戸棚を開けて見てみると一面のカビ、などということは、多くの人が経験していることであろう。冷蔵庫のない昔は、よく食べ物をいためてしまふことがあり、今より食中毒も多かった。

(語注) ○えだわすなⅡ「いたわしいな」の訛り。標準語でいうと「もつ

たいないな」にあたる。「いだわす」は「いだます」。「いだわすねえ」などとも言ふ。この例のように人によっては「い」が「え」に近く聞こえる。「い」の唇の横への開きが弱く、舌の盛り上がり位置が少し後ろの方へずれるためである。標準語の「いたわしい」の訛りで、もともと苦勞である、という意味だったが、そこから気の毒、不憫という意味にもなった。標準語では「いたわしい」という言葉はあまり使わない。「お」をつけて「おいたわしい」というと、哀悼の気持ちを表わす言葉として使われている。盛岡弁でも、そういう使い方もあるが、この例のように、惜しい、もつたいない、という意味でもよく使う。

○くされらがすⅡ「くらがす」は標準語の「くらせる」にあたる使役の助動詞である。たとえば、「こびらがす(垢をつけらせる)」、「あめらがす(腐らせる)」、「しみらがす(凍らせる)」などという言葉もある。

○はあⅡ副詞で「もう」にあたる。「もはや」あるいは「はや」が約音化して、簡単な発音しやすい言葉に変化したものである。たとえば、「はあ、くつたてが(もう食べたの)」とか「はあ、きた(もう来た)」「はあ、ねだ(もう寝た)」などと言う。

○かれねⅡ「食べられない」。「くわれない kuwarenai」の半母音^wが弱くなり^eが消え、^{ee}の二重母音^{ee}が^eになって「かれね」となった。反対に「かれる」は「食べられる」という意味の可能動詞となる。同様にして「みれる(見ることができ)」「ねれる(寝ることができ)」「きける(聞くことができる)」など、いずれも可能動詞で標準語にはないものである。

五、ぶすくれで いつつも、かつつも あいそあね

(標準語訳) 不機嫌な顔をして、いつも愛想がない。

(解説) 世の中にはいつも無愛想な、面白くなさそうな顔をした人がいる。そんな人は時に「しぶい人だ」とほめられたりすることもあるが(?)、敬遠されることも多い。別に人に媚びへつらう必要はないが、できるだ

け咲顔（「笑顔」ではない）で人と交流したいものである。道元も「和顔愛語」と言っているように、にこやかな表情、やさしい言葉は人に対する「布施」でもある。

（語注）○ぶすくれる||「ぶすつ」と「ふくれる」がつまり一語になった。「ぶす」は、おそらく「いぶす」の「い」の脱落した言葉で、火が燃え上がらないで、くすぶっている状態である。燃え上がればカツと怒りを表わすことになるが、そのように火がつかない状態で、「不機嫌」などという言葉より、具体的なイメージをもったわかりやすい言葉といえよう。

○いっつも、かつつも||いっつもいっつも。単に「いっつも」でもよいが、それを強調して、言葉遊び化して「いっつも、かつつも」と言う。「かつつも」は特に意味のない言葉であろう。「いっつも」は促音化して「いっつも」と言うのが普通で、強調し、思いをこめた表現になっている。

○あいそ||人当たりの良いさま、他人に良い感じを与えるような態度。かわいらしい顔つき、やさしい物言い、対応の仕方などをいう。「あいそ」に「あいさう」とも表記され、「あい」に「愛」や「哀」、「そう（さう）」に「相」・「想」・「崇」・「増」・「荘」などの漢字が当てられて一定しない。愛らしい様子の意で「アイソウ（愛想）」が語源だとする説もある。「あいそあ」で、「あいそうが」の意。つまり格助詞「が」の子音が脱落して、母音だけが拗音のように残ったもの。

○ね||ない。「ない、nai」の二重母音²はeとなる。

六、ゆぶてえなあ たぎぎあすめつて ひっこあつがね

（標準語訳）煙いなあ、まきがしめつて火がつかない。

（解説）昔は、かまどにタキギをくべて煮炊きをした。マッチで新聞紙に火をつけ、細かいザツパから、太いタキギへと火を移し広げていく。湿ったタキギが煙って火がつかず、涙をこぼしながら、かがみ込んで火をつけた。火を竹筒で吹いてあおったりもした。

（語注）○ゆぶてえ||けむたい。標準語の「いぶす」は盛岡弁で「ゆぶす」となる。その形容詞が「ゆぶてえ」「ゆぶたい」である。「たい」という接尾語は「いたし」の「い」が脱落したもので、名詞や動詞の連用形など体言に準ずる語について、形容詞を作り、その程度のはなはだしいことを表わす。「めでたい」「うしろめたい」「つめたい」などの「たい」は、すべてこの「いたし」からきている。

○たぎぎ||まき。語中のカ行音は濁音化するので「たぎぎ」となる。上の「ぎ」は本濁音、下の「ぎ」は鼻濁音で、アクセントは最後の「ぎ」が高くなる。「焚きものとする木」という意味であろう。盛岡弁では「まき」はあまり使わない。

○すめる||「しめる」の訛り。「し」の母音²の発音があいまいで、²に近くなるため「す」に聞こえる。

○ひっこ||火。「こ」は名詞の下につける親愛の気持ちを添える接尾語。例「べごっこ（牛）」「あめっこ（雨）」「ほんこ（本）」「んまこ（馬）」などと言う。

七、こちよがつて こちよがつてば おめえさん

（標準語訳）くすぐりたい、くすぐりたいってば、お前さん。

（解説）足の指とか、脇の下をくすぐってからかう、ふざけたりした、あるいはされた思ひ出は誰にもあろう。（特に子供時代の懐かしい思い出として）子供は涙を流して笑いころげ、「やめて、やめて」などと言う。しまいには笑いながら腹を立て、ついに本気で怒り出したりする……。

（盛岡弁絵手紙では親しい男女がふざけ、からかっている場面として描かれている）

（語注）○こちよがつて||「くすぐる」ことを盛岡弁では「こちよがす」と言う。その形容詞「くすぐりたい」は、「こちよがつて」と言う。「こちよこちよ」というのは、くすぐる様を表わす擬態語で、こまこまと動作する（すばしく動き回るとか、小走りに行き来するなど）の時にも

使う。標準語の「くすぐる」という語も「こちよぐる」「こそぐる」「くすぐる」と変化してできた言葉であろう。幼児をくすぐる時に「こちよこちよ」と言っていくすぐる。「こちよこちよ」は名詞としても使う。「くすぐったがる」ことは「こちよがってあがる」と言う。

また「こちよめがす」は、人に隠してこっそり行うこと、つまり、標準語の「こそこそ」を動詞化したものである。

○おめえさん〓「お前(おまえ)さま」が「おめえさん」となった。元々「お前」というのは二人称の尊敬語であるが、多く使われているうちに、その敬意が薄れてしまった。江戸時代に使われた「おめ」とか「おめさん」は、対等以上の人に対し、多分の敬意を込めて用いている。妻が夫を呼ぶ時にも用いられた。「おめえさん」は「おめはん」とも言う。「おめはん」は江戸時代、主に遊里の女性が用いた。盛岡弁の「おめはん」は、やわらかで親しみのこもった呼び方であるが、甘えるような響きがあり、目上の人には使えない。「おめあ」は、同等もしくは下位者に対して用いられる。

八、まごかたで けるであらあ だがげでぐ

(標準語訳) 孫の相手をしてくれよ。私は出かけていく。

(解説) 戦前は両親、祖父母、子供と三世同居がよく一般的で、孫の世話をするのはお年寄りの大切な仕事だった。田畑に出かけて仕事をする若い夫婦は、お年寄りにこんなふうに言ってお孫の世話を頼んだ。

(語注) ○かたで〓相手にして。「かてる」はもともと「入る」「加わる」という意味で、「おめえもかたれ」というと「お前も仲間に加われ」という意味である。加える、加わっていつしよに遊ぶ、ということから「かてる」は仲間に入れる、そして相手にする、という意味にもなった。名詞として「まごかたで(孫の世話)」という言葉もある。ちなみに、「かたで加えて」という時の「かたて」はこの「かてる」である。

○けるであ〓「ける」は「くれろ」の訛り。標準語の「くれよ」「くれ

や」に当たる。「kureto」の流音r音が消えて、さらに母音のeのeが消えたもの。標準語でも「くれる」は、本来、物を与えるという意味から、補助動詞として「くしてくれる」と相手に恩を施す時にも使う。「くしてくれる」の謙讓表現が「くしてあげる」であるが、盛岡弁では使わない。

「であ」は人によっては「じゃあ」ともなる。末尾に「であ」がつくと表現が柔らかく依頼するような形になる。標準語の「よ」や、ちよっとくだけた「や」に近い。

○だがげでぐ〓「でかけていく」の訛り。「でかける」は「でがける」と濁音化する。また「いく」は「いぐ」となるが(語中のカ行音はすべて濁音化するから)、上に動詞が来て複合動詞のようになる時は「い」が脱落する。「くってぐ(食べて行く)」「のってぐ(乗って行く)」「はせでぐ(走って行く)」「あるいでぐ(歩いていく)」のように。

九、あのわらすあ ごんぼほつても かもごどあね

(標準語訳) あの子供が駄々をこねても相手にすることはない。

(解説) 子供は時にわがままで勝手なもの。欲しいとなったら駄々をこね、地団駄をふんで、泣いて、買ってくれ、とねだることがある。親は恥ずかしいやら腹が立つやらで困ってしまう。ほしいものはすぐに買ってやれることの多い裕福な現代に比べ、昔は貧しくて、買ってやれないことが多かった。

(語注) ○わらす〓古語の「わらし」の訛り。「わらし」は近世において使われ、平安時代には「わらべ」「わらわべ」の変化した「わらんべ」が多く用いられた。男の子の場合、「おどごわらす」、女の子の場合「おなごわらす」と言う。「がぎ」「餓鬼」の盛岡訛り)は卑語で、相手を卑しめて言う時の言葉である。

○ごんぼほる〓駄々をこねる、わがまをいう、しつこく文句をいう、酔ってくだを巻く。「ごんぼ」は「ごぼう」の盛岡弁で、その訛り。長音

は一般に短音化して「ごほう」が「ごぼ」となる。この「ぼ」を鼻濁音化して「んぼ」のように発音するところから「ごんぼ」となった。ごほうの細くて長い根を掘るには、一箇所根をすえて根気強くやらなくてはならない。それを酒飲みや子供がすすわってこ(梃子)でも動かないで、勝手なことを言うことの喩えに使ったものと思われる。農民の作り育てた言葉であろう。

○かもごどあね^{ll}「かまうことはない」。「かまう」は盛岡弁で「かまう」とか「かまる」「かもある」「かまうな」は縮約して「かもな」となる。「かまわなでくれ」は「かもねでけれ」と言う。「ことはない」は「こと」が濁音化して「ごど」となる。係助詞「は^{wa}」は、子音^hが消えて母音だけ残るので「ごどあ」となり、「ない^{nai}」の二重母音^{ai}は^oとなるので「ね」となる。

十、とげえちよすて ぶつかしてすまた いだますね

(標準語訳) 時計をいじって壊してしまった、もったいない。

(解説) 子供の時、こわれた時計を直そうとして、又、どういうふうになつて見たくて、裏ぶたを開けて、大小の歯車の複雑に重なつたそれをかえつてメチャメチャにしてしまった、という経験は多くの人がもっているであろう。もったいない話だが、故障すればすぐ専門の修理屋に出す「大人」より、好奇心、向学心に富んでいる。しかし、その結果はどういうわけか、たいてい失敗する。それでも好奇心は満たされる。もつとも、近年の機器機械の類は、分解してもどうい理解できないものが多いように見受けられるが……。

(語注) ○とげえ^{ll}「とけい」の訛り。盛岡弁では語中のカ行音はすべて濁音化するので「け」は「げ」となる。「い」は「え」に近く発音されるが、語末に来た時はきちんと一拍にとらず、拗音(小さく表記される「ゃ」「ゅ」「ょ」の表わす音声)のように半拍となることが多い。「とげえ」でなくて「とげえ」である。「げ」は本濁音で鼻濁音ではない。「と

げ」でなく「とげえ」と表記したのは「げ」の後の「え」は短い、ここにアクセントがあるからである。

○ちよす^{ll}いじる。古語の「ちようす」(嘲す)が方言として残つたものである。古語では、あざける、ばかにする、からかうという意味で、九戸郡や仙北郡では「ちよす」をそういう意味で使うこともある。もつもの「嘲す」という漢字のイメージが忘れられ、しばしば使われているうちに、いじる、という意味に変化したと思われる。

○ぶつかす^{ll}「ぶちこわす」の縮約形。「ぶち」は「ぶつ」と促音化する。「ぶつくらしえる(ぶちくらかわせる)」「ぶつとばす(ぶちとばす)」「ぶつちやく(ぶちやく)」のように。この現象は標準語にもみられるが盛岡弁の方が徹底している。「こわす^{kowasu}」は半母音^wが消え^{oa}という二重母音の^oが消えて「かす」となる。「かされだ」というと「こわされた」、「かすぞ」というと「こわすぞ」という意味である。

○いだますね^{ll}もったいない。「いだます」は古語の「いたはし」、標準語の「いたわしい」である。標準語の「いたわしい」は心が痛む、気の毒である、ふびんであるということ、「おいたわしいことをしました」と言えば甲意を表わす言葉になる。盛岡弁では、もったいないという意味で、広く使われている。「ね」は「ない^{nai}」の二重母音^{ai}が^oになつたもの。ただし否定の「ない」ではなく、接尾語の「ない」で、意味を強調し形容詞化する。「いだます」(「いたわし」と「いだますね」(「いたわしない」)はほとんど同じ意味で、後者は強調した言葉ということになる。「いたわし^{itawashi}」が「いだます^{idamasu}」となるように、半母音の^{ai}は両唇音の^{oi}に変化し易い。

十一、やしえのごど やへつてそうやづあ じえごたろだ

(標準語訳) やせた人のことを「やへ」って言う人は田舎者だ。

(解説) やせた人のことを「やせ」と言うが、その盛岡訛りが「やしえ」である。しかし盛岡でも太田や仙北町など、あるいは周辺の村では「や

へ」と言う人が多い。そこで町方の人は、そういった発音をする人を田舎者だと笑うわけである。

(語注) ○やしえい「やせ」の訛り。舌先が歯茎の裏から、上の方に上がり、調音点が硬口蓋にずれるため子音が^シとなる。そのため「せ」が「しえ」となるのである。

○そう^ソ言う。「そう^ソいう」が縮約したものであろう。「そう^ソいった」は「そった」、「そう^ソいわないで」は「そわねで」、「そう^ソいつている」は「そつてら」と言う。「そう^ソ」は盛岡でも町方の言葉であり、太田・仙北町・厨川などでは「へう」「へる」を使う。広く南部藩―八戸・十和田・三戸なども「へう」「へる」である。盛岡弁の「そう^ソ」が「へう」「へる」に変化したと思われる。

○じえごたる^ジ在郷者。「在郷」という言葉は、田舎、在、ということと室町時代あたりから使われ、「在郷党」「在郷男」「在郷軍人」などという言葉がよく使われていた。「ぢえご^ジう^ウzaigou」の二重母音^{ジウ}が^ジとなり、長音が短音となって「じえご」となった。「^タたる」は「太郎」で「^タる^ル」という長音が短音の「^タる」となったもの。

十二、はらあんべ わるぐなつたであ なすてだべ

(標準語訳) 腹具合が悪くなったよ。どうしてだろう。

(解説) 腹痛や胃痛の時、何か食べたものでも悪かったかと思いついてみる。そして、ああ今朝の牛乳のせいだ、などとわかる。そんな日常の平凡な思い。

(語注) ○はらあんべ^ハ腹あんばい、腹具合。「あんばい」はもともと「えんばい(塩梅)」で食物に鹹味(からみ)をつける「塩」と、酸味をつける「梅」をいったもので、合わせて食物の調味、味加減をいう。標準語では「おなかの具合はどうですか」と言うが、盛岡弁では「はらあんべ、なじよすか」と「あんべ」を使う。

○わるぐなつたであ^ワわるくなつたよ。「わるい(悪い)」は「わりー」

と言うが、「わるくなる」は「わるくなる」と言う。その反対が「いくなる(よくなる)」である。

○なしてだべ^ナどうしてだろうか。「なして」は「なにして」が変化したもので、江戸時代の洒落本などにも見える。「^ダだべ」は「^ダだろうか」で、「^ダだ」は断定の助動詞、「べ」は「べし」の「し」が脱落したもので推量の助動詞。

十三、まめすくて おりやんすたすか おどつつあん

(標準語訳) お元気でいますか、お父さんは。

(解説) 「お元気ですか」「お元気でいらつしやいますか」などと相手の健康を尋ねるのは最も一般的な挨拶言葉である。この盛岡弁は最も使用頻度の高い言葉で、親しいうちとけた間柄なら「まめすくてらが」などと言う。

(語注) ○まめすくて^マ元気で。「まめしくて」の訛り。形容詞「まめし」は、古語としてはまじめだ、実直だ、勤勉だ、実用的だという意味で、中世になって、健康だ、すこやかだというような意味も生じてきた。盛岡弁の「まめす」は、この意味が残ったものである。

○おりやんすたすか^オ「いらつしやいましたか」の意。敬意を省くと「いだが」「いだすか」「おつたすか」「おつたが」などと言う。「やんす」は連用形について、尊敬の意を表わす。近世前期には遊女語だったが、後期には一般化し、全国に広がったとされる。「おりやんす」で「いらつしやる」。

「おる」は、現代では「私はこちらにおります」のように自分を卑下する時に使う謙譲語である。しかし、盛岡弁では「いる」より丁寧な表現として使われる。「すか」は丁寧な質問する表現で「ですか」の「で」の脱落形。「すすか(そうですか)」「えぐすか(行きますか)」「わがねすか(だめですか)」などとよく使う。

十四、じよすこーせー でごあす、おっぴろげで ねまつてら

(標準語訳) 女子高生が大根足を広げて座っている。

(解説) 近ごろ、電車や路上で座り込んでいる若者をよく見かける。地べたに座っているのが「ジベタリアン」というのだという。若者達は恥ずかしげもなく、太い足(?)を広げて座り、にぎやかにおしゃべりしたり、ケータイ電話を使ったりしている。そんな若者を見て、眉をひそめるおじさん、おばさんも多い。

(語注) ○じよすこーせー||女子高生。もちろん一般的には「じよしこーせい」と表記する。しかし盛岡弁では「し」は「す」に近く(母音)が「に」に近く発音されるため)発音される。和語や漢語の長音は「う」で表わすことになっているが、単独な「う」の発音とは別で実際には「う」の前の母音を一拍伸ばす長音である。つまり「こう(高)」は実際の発音からすれば「コオ」である。片仮名外来語の場合、これを「コー」と長音記号で表わす約束になっている。ここではそれに従って表記した。「せい(生)」は、語末に来る場合、自然な実際の発音は「せー」である。

○でごあす||「だいこんあし」の訛り。daikonashiの二重母音aeがとなり、語中のカ行音(ここでは「こ」)は濁音化し、撥音の「ん」はほとんど消え、「し」が「す」になったもの。

○おっぴろげる||「おしひろげる」が、促音化し、それに伴って「ひ」が「ぴ」に半濁音化したもの。「ひろげる」の強調形。

○ねまつてら||すわっている。「ねまる」は、座るという意味。芭蕉に「涼しさをわが宿にしてねまるなり」の句がある。その「ねまる」である。

十五、めんけえなあ おめはんとすあ なんぼだえ

(標準語訳) かわいいね、君は歳はいくつなの。

(解説) 大人に向かって歳を聞くのは場合によっては失礼になることもあるが、子供には、そんなことはない。子供は一日一日と成長する存在

だから、そんな子供をみると大人達はずいぶん年齢を聞きたくなくなる。子供は何のためらいもなしに、かわいい声で「三つ」とか「五つ」と言う。そうすると、大人は「おりこさんだごど、ほにほに(本当に)めんげえごど(かわいいこと)」などと感嘆の声をあげる。

(語注) ○めんけえ||かわいい。「めんげえ」「めんげ」「めんこい」とも言う。古語の「めぐし」が近世の「めぐい」を経て各地の方言として「めぐこい」「めんこい」「めげー」などという形で残っている。「めぐし」は、気がかりだ、かわいい、いとしいなどという意味で、動詞「めぐむ」に対応する形容詞である。つまり、めぐんでやりたくなくなる、庇護してやりたくなくなる、というのが「めんけえ」である。

○おめはん||「お前さん」の訛り。「お前 omae」の二重母音aeは単母音のとなりとなって「おめ」となる。「はん」は「さま」の変化した音で「さま」が「さん」となり、江戸時代に遊女の言葉として「はん」が用いられた。相手に向かって「お前」などというのは目下の人以外には使えないが、盛岡弁では「おめさん」とか「おめはん」時には「おめえはん」という形で目下に限らず、対等な相手、親しい相手によく使う。

○なんぼ||「なにほど」の変化した言葉で(撥音化、濁音化が起こっている)「なんぼう」を経て「なんぼ」になった。「なんぼでも(いくらでも)」「なんぼなんでも(いくらなんでも)」「なんぼなんでも(いくらなんでも)」「なんぼでも(いくらでも)」「なんぼでも(いくらでも)」「なんぼでも(いくらでも)」の省略で「うでしようか」という推量表現。「んだべえ(そうでしょう)」が「んだえ」となったり、「くるべ(来るだろう)」が「くるえ」となるように、「べ」が省略されることがある。

B 盛岡弁の発音と仮名表記

はじめに——方言の仮名表記

平仮名・片仮名（以下合わせて「仮名」とする）は表音文字といわれ、一般に音声・音（言語音）をそのまま表記した文字、あるいは表記できる文字だと考えられている。なるほど、私達は人の話を聞いて、さほど苦もなくそれをそのまま仮名で書き取ることができる。逆に書かれた仮名をそのまま音声に変換することもできる。これに対して「漢字」は表意文字と呼ばれる、意味を表わす文字とされる。（厳密には、音と意味の両方が、その文字に結びついているというべきである）。漢字はその数も多く、書けない、読めないこともしばしばある。それに対して、仮名を書けないことは、まずないから、仮名は音声を写し取る文字として大層便利である。

しかし、音声学や音韻論が教えているように、音声を正確に緻密に表現する手段として、仮名は絶対のものではなく、きわめて便宜的なものである。仮名には高低アクセントや強弱などの符号がつけられることもないし、鼻濁音の区別もない。私達は音に注意深く耳を傾け、それを忠実に写し取るうなどと思っておらず、むしろ意味を汲み取って、その意味を表わそうとする傾向が非常に強いのである。そもそも、書き言葉なるものは、たとえ仮名であっても、それが書かれる時は、話し手の音声を伝えるものとして書かれるのではなく、意味を伝えるものとして表記されている。まして論文などの場合、一般には、音声化されることを予想しない思索と結びついた言葉であり、「沈黙の言葉」なのである。

日常の話し言葉を文字に書き記す時、音声にこだわらず、それを厳密に表記しようとしたら、かえって相手の言おうとすること、その考えや気持ちそのものが伝わりにくくなる。書き言葉は音声の観察、記述をめざしているのではなく、相手の伝えようとする事、相手の考えや気持ちを汲み取って、その意味を表記しようとしているからである。

ところが、方言を表記する時、その意味内容よりも、発音や言葉それ

自体に強い興味、関心を抱いて、それを写し取ろうとすることがある。意識がその発音に、また言葉それ自体に向けられるのである。方言学・音声学・音韻論といった学問も、音声に特別な関心をもつから、当然、発音をどう表記するかに注意を払い、的確・精密にその発音を写し取ろうとする。

その時登場してくるのが、ローマ字や国際音標文字である。音声について科学的に分析的に表記するには、これらの文字は確かに便利である。しかし、これらの文字による表記はなじみにくいし、また、これらの文字によって、なるほど、発音はある程度正確・緻密に表現できるかもしれないが、意味をとるのが難しくなる。仮名表記は、漢字の表記に比べて意味をとるのに時間がかかるのだが、これらの文字はそれどころでない。日本語ローマ字で書かれた文章を読むのに難儀したことを思い出してみれば、これはよくわかるはずである。

発音を写し取るためには、この日本語ローマ字でも不十分であって、それに様々な工夫を加える必要が出てくる。その様々な工夫をすればするほど音声は正確、緻密に表現できるようになる反面、逆に意味内容からは遠ざかり、文字を見てもイメージが湧きにくくなる。意味を無視して音声に徹底的に執着する場合はそれでよいが、私達は日常会話において音声と意味を結びつけて言葉を理解するのである。そのようなことを考えてみると、一般の人相手の方言の表記としては仮名表記が便利だということに落ちつく。

筆者は、新聞発表する時の盛岡弁の表記として平仮名を使ってきた。（ただし、本稿の表記は片仮名とした）。その中で、しばしば直面したのは、発音をどう書き表わせばよいか、ということである。具体的にいうと「イ」なのか「エ」なのか、「シ」なのか「ス」なのか、「セ」なのか「シェ」なのか……といった問題にしばしば直面してきた。そしてこの問題をつきつめて考えることなしに、その時、その時、便宜的に表記してきた。ここで改めて盛岡弁の発音を仮名で表記する場合、どう書けば

よいのか、辞書の記述はどうあればよいのか、一通り整理して私なりの結論を出してみたい。その場合、盛岡弁の話者の意見（感覚）を大切にしていきたいと思う。

まず初めに、盛岡弁をどう表記しているか、何種類かの辞書を紹介し、そこでの表記の仕方を紹介しておきたい。

一、盛岡弁の辞書

盛岡弁の辞書として第一に挙げられるのは『盛岡のことば』（昭和五十六年刊、佐藤好文編）である。これは総数二十四名のメンバーが、毎月一回（後には二回）の定例会（九年間、総計百回を越える）をもって約七千語に及ぶ語彙を採集して辞書としてまとめたものである。

この辞書の特徴として次のようなことが挙げられる。

①長期にわたり多くの人々からの情報提供を受け、豊富な語彙を採集した本格的な辞書であり、これまで出された盛岡弁の辞書の中で、質・量共に最も充実したものである。

②すべての単語にアクセントを示している（この辞書は横書き表記である）。アクセントの高くなっている部分に傍線を施し、アクセントの滝（低くなる部分）は傍線の最後にカギを施してこれを示している。たとえば「カレル（くわれる）」「ガンス（がんす）」「トツケアル（とりかえる）」「スケツト（すけつと）」「トストリ（としとり）」と表記している（筆者の観察によると、これらのアクセントの表記は必ずしも正確でないように見受けられるが、今はそのことは問題にしないことにする。また、括弧内に、これらの例でわかるように、標準語の平仮名表記をしている）。

③盛岡の方言は、「イ」と「エ」の区別が発音上はつきりしない、というより「イ」は「エ」に近いとして、標準語の「イ」はすべて「エ」としている。そのため「イ」で始まる語は記載されていない。たとえば「いっとき（一時）」は「エツトギ」、「いびる」は「エビル」、

「いく（行く）」は「エグ」と表記している。

④「シ」と「ス」についても、「シ」の一部と拗音を除いては「ス」と区別しがたいとして「ス」に含めている。たとえば「顔をしかめる」の「しかめる」は「スカメル」、「色紙」は「スギス」となっている。

⑤母音の無声化を表記している。たとえば「クシエ（くさい）」「コメル（ひっこめる）」のように①印で囲み、これらの音節は母音が消えていることを示している。②はクの母音の ϵ が消えて、子音の ϵ だけが残った音で、③はヒの母音の i が消えて、子音の i だけが残った音である。

⑥ガ行鼻濁音をカキケケゴのように表記している。たとえば「チャクチャクマッコ（ちやくちやくまっこ）」「コチョコカス（こちょがす）」「コゴリ（こごり）」としている。

⑦解説は、単に意味を記すというのではなく、時に語源や例文まで示している。惜しむらくは、その例文が標準語と方言を交えているため、盛岡弁の例文（会話）となっていないことである。

第二に挙げたいのが『南部のことば』（昭和五十七年刊、佐藤政五郎編 伊吉書店）である。

この辞書は八戸を中心として、三戸郡や岩手県の久慈市の話者から調査した結果に基づくものであるが、盛岡の言葉—なかでも、厨川や太田など、新しく盛岡市に加わった地域の言葉—かなり近い。そのことから、広い意味での盛岡弁すなわち南部弁と考えてよさそうである。（ただし、子細に検討すれば八戸・三戸などの言葉と盛岡の言葉の違いもあるはずで、それについては、これからの課題としたい）この辞書の特徴は次のような点にある。

①八千語に及ぶ豊富な語彙を採集した南部弁の貴重な辞書である。おそらく南部の言葉をこれ程集めた辞書はないであろう。

②語彙は普通の平仮名で表記し、アクセントやガ行鼻濁音などの特別

な工夫はしていない。

③時によっては、その言葉が、どの地域の言葉か、その言葉を使っている人の職業が何か(農業、漁業など)といった情報も示している。

第三に『岩手方言集』(小松代融一著、図書刊行会)が挙げられる。これは旧南部領と旧伊達藩に分けて、広く岩手県全体の方言を採集したもので、延べ語彙数は一万六千語にのぼる。この辞書の特徴は次のような点にある。

- ①岩手県全体の方言を広く採集した唯一の辞書である。
- ②表記は片仮名を用い、ガ行鼻濁音はカ。キ。ケ。ゴと表記している。アクセントは表記していない。
- ③方言語彙については、解説というより「訳語」といった感じで、簡潔にその意味を記している。用例もない。従って、その言葉自体について詳しく知りたい、という場合、物足りない。
- ④訳語の下に数字を載せ、採集地点、文献資料にどの位使われているかを示している。数の多いのはよく使われる方言、数の少ないのはあまり使われない方言とみてよいであろう。確かにあまり使われることのない方言を、何か面白い言葉を見つけたとばかり飛びつくのは問題で、使用頻度の記述はこの点参考にはなる。

第四に、『みちのく南部の方言』(平成八年刊、岡田一二三著)が挙げられる。これは青森県南部地方と岩手県北の青森県境地帯の言葉を採集したものである。

この辞書の特徴は次のような点にある。

- ①解説が詳しく、読みものとしても楽しい。その解説は、たとえばどの地域の、どういう職業の人の言葉だとか、古語との関連、言葉の変化していった過程、語源についての諸説の紹介、自説の展開など、長い研究、調査の跡がうかがわれる。

②図や写真なども添えられ理解を助けている。

③民俗学的な知識、知見が豊富である。

④方言の表記は片仮名、横書きで、次のような配慮をしている。
ア、ガ行鼻濁音をカ。キ。ケ。ゴと表記している。

イ、アとエの中間音があるとして[㊦]という発音記号も添えている。

ウ、長音の発音は「ドーダリ(どうなり)」「ゴンボー(ごぼう)」のようにすべて長音記号(ー)で表記し、「ウ」は用いない。

エ、見出しとして一語だけ挙げるのではなく、たとえば「ジギ/ジンギ〔辞儀〕」のように異なる表記も並べ、その意味を簡潔な言葉で示している。

オ、アクセントは一つ一つ挙げていないが、特に必要なものについては説明している。

以上のような辞書の方言表記から考えて、次のようなことがいえる。発音の表記は一つの約束である。同じ発音で聞いても、それをどう表記するかは、違いがでてくる。その違いに辞書それぞれ(辞書の作成者それぞれ)の関心や視点の違いが反映している。従って方言の表記について、この表記が「絶対に正しい」「こうすべきだ」ということはいちがいにはいえない。

様々な辞書を紹介してみたが、これらの辞書の中で、仮名を用いながらも発音それ自体に最も関心をもち、その表記に心をくだいているのは『盛岡のことば』である。これは日本放送協会放送文化研究所で発行している『日本語発音アクセント辞典』の表記にならったものと推察される(本来なら、そのことをはっきり断るべきであろうが、そうした記述はない)。たとえば、片仮名書きでアクセントを表記していること、鼻濁音や母音の無声化の表記など、この辞典と全く同じである。

『日本語発音アクセント辞典』はアナウンサーのための範となる日本語の発音の拠り所として編集されたものである。アナウンサーに限らず、

一般市民の間でも標準語の発音を表記した拠り所として利用されている。しかし範となる盛岡弁の発音を学習するという人はあまりいないのだから、アクセントや無声化、鼻濁音の表記は音声学の研究書ならともかく、必ずしも必要としないと思われる。それらは自分の記憶の中の音声、方言話者としての自分の発音、あるいは方言話者の話を聞いて確かめればよい。そこで筆者は方言辞書の、あるいは方言解説書の表記として次のような原則を立ててみた。

①意味をとりやすい仮名表記とする。方言であることを示すため鈎括弧でくくったり、ゴチック体にして平仮名を用いる、あるいは、片仮名を用いて方言音声であることを示すこととする。

②アクセントや無声化、鼻濁音は表記しない。これらについては、辞書に見出しとして記述するのではなく、一括して整理して解説するのが合理的であろう。

③長音については「う」という表記は音声の表記としては多少違和感があるので、長音記号(ー)で示す。たとえば「サミー(寒い)」「オドー(おとうさん)」のように表記する。

④方言は範として身につけようとするものでなく、自然に身につけているものである。その身についた方言を素材として学習するために、系統的、体系的に、興味深く学べるように標準語引きとする。たとえば「かわいい」という見出しにして「メンコイ・メンゴイ・メンケー」などと盛岡弁を記すのである。

二、盛岡弁の発音(その表記)

(1) 「イ」と「エ」

岩手県でも県南(伊達方言)では「イチバン(一番)」が「エツバン」に、「イタイ(痛い)」が「エダエ」・「エデア」となり、特別な言葉以外には標準語の「イ」はないといっているほどであるのに対し、沿岸・県北部では、はつきりと「イ」音が用いられ、辞書においても「イ」で始

まるものが多く採集されている、という指摘がある。(『岩手方言の音韻と語法』小松代融一著)

確かにその通りで『盛岡のことば』では「イ」で始まる音をすべて「エ」としているが、これに強い違和感をもつ盛岡弁の話者が多い。筆者の主催している盛岡弁研究会のメンバーによると「イド(糸)」「イワ(岩、まれに「ユワ」もある)」「イガ(烏賊)」「イス(石)」「トリイ(鳥居)」などといった言葉の「イ」を「エ」と表記するのは正しくないという結論であった。但し、例外として「エガ(栗の殻)」「エバル(威張る)」などは「エ」とするのが自然だということである。これらの言葉については、訛って「エ」となったのではなく「エガ」「エバル」という言葉だとの意識している人が多いとも考えられる。識字率の高まり、文字との接触の増加、テレビやラジオを通じての標準語の浸透といったことが背景となって「イ」と「エ」の区別が、かつてより明確になってきていることも考えられよう。

同じ盛岡でも(県内であればなおさら)、地域や個人による違いもあって盛岡弁の標準音はこれだという形では決定しがたい多様性がみられる。辞書にもその多様性を認めて、表記に幅をもたせた方がよいようである。

たとえば、糸を「エド」とのみ表記するのではなく、「イド」・「エド」と表記し、どの地域・世代でどう発音されているかを吟味するのが良いと思われる。糸の場合、「イド」が圧倒的であったが、標準語の発音に親しんだ人からすれば、「エド」に近く聞こえるかもしれない。しかし、その地域の人からすると「エド」と表記されると違和感を覚えるということもある。

音韻論では、個々の具体的な音声を抽象した「意味のまとまり」としての言葉に焦点を当てて、これを／＼で示している。

音声学では逆に発音そのものをできるだけ科学的・合理的に記述しようとし、一般にはローマ字、それに様々な符号をつけたもので示すこと

が多い。しかし前述したようにこれは逆に意味・イメージが把握しにくく、音がただちに浮かび上がってこない。そこでこれも仮名によって示してみるとたとえば次のようになる。

／イト(糸)／Ⅱ「イト」(「エド」)

標準語索引の辞書では見出しとして、たとえば「イト」として、その方言としてイド・エドのようにするのが便利で、これをさらに「イド(一般的)」、「エド(まれに)」のようにどの程度使われているか、どの地域で使われているか、などといったことを示すと、研究の指針にもなる。方言引きの辞書の場合、「イト」「エド」という二つの見出しを立てなくてはならず、そのようにして方言を集録すると、見出しとなる語彙が多くなりすぎて煩瑣である。

(2) 標準語の「セ」「ゼ」が「シェ」「ジェ」または「へ」となることが多い。

たとえば、「アセ(汗)」が「アシエ」とか「アへ」と発音される。これは「セ」の子音^s(歯茎音)の舌先が軟口蓋の方に移動して発音されるためである。つまり「セ」の子音は歯茎摩擦音から口蓋摩擦音化する傾向がある。ところが盛岡でも中心部から離れ、厨川や太田などでは、この「シェ」がさらに「へ」という音声に変化しやすい。つまり、舌先や舌面を使わない、声門摩擦音になるのである。

例を示せば、「ゼニ(銭)」は「ジュニ」、「カゼ(風・風邪)」は「カジエ」、「センセイ(先生)」は「シェンシェ」、「サレ(去れ)」は「シャレ」、「ヨサレ(寄され)」は「ヨシャレ」あるいは「ヨハレ」、「サイフ(財布)」は「シエフ」、「ヤセル(痩せる)」は「ヤシエル」あるいは「ヤヘル」、「セナカ(背中)」は「シエナガ」あるいは「ヘナガ」となる。

前例にならって、これを音韻論、音声学によって示せば、

／アセ(汗)／Ⅱ「アシエ」(中心部)「アへ」(厨川・太田)

／ヤセル(痩せる)／Ⅱ「ヤシエル」(中心部)「ヤヘル」(厨川・太田)となる。

(3) 濁音・鼻濁音・撥音の挿入

ガザダバ行、及びこれに応ずる拗音の音節(ギャ・ジャ・ピヤなど)を「濁音」という。濁音に対立するのが「清音」で、カサタハ行、及びこれに対する拗音の音節(キヤ・シャ・ヒヤなど)である。清音・濁音とは、その音の与える印象、イメージから名づけられた名称で「濁音は濁っていて汚い」「東北弁は濁音が多くて汚い」などというのは、偏見であり、個人的な好みや感覚にすぎない。それは自分が聞き慣れていなくても、東北弁を話す人についての、表面的な印象からくるものが多い。濁音といわれる音節すべてを清音にしたなら、日本語は「声」のない腑抜けたしまりのない言葉になってしまうだろう。

清音・濁音を、音声学的に分析すれば、「無声音」か「有声音」か、ということである。たとえば「カ」の子音^kと「ガ」の子音^gを比較してみると、^kは声帯の振動を伴わないのに対し、^gは声帯が振動する。そこで^kを無声音、^gを有声音というのである。

また同じ濁音——有声音でも、鼻から息を抜かず音があり、これを「鼻濁音」という(これに対して口から息を抜く濁音を「本濁音」と呼ぶことがある)。「ガ行鼻濁音」とは本濁音のガギグゲゴに対してカギクケゴと表記されることもある。

「世の中は澄むと濁るで大違い。ハケ(刷毛)に毛があり、ハゲ(禿)に毛はなし」などという言葉があるように、一般に清音か濁音かは意味の弁別にもかわる重要な違いがある、と思われている。しかし日本語の歴史の上では古くは「仇」は「アタ」、医師は「イジ」、信仰は「シンゴ」と発音されていたとされており、時代によって濁音が清音になったり、また逆に清音が濁音になったりや変化している。同じことは地域差についても言えることで、盛岡弁は標準語の清音が濁音化することが多い。そこに一定のルールのようなものがある。それをまとめてみると次のようになる。

① 標準語の語中のカ・タ行音の清音は、盛岡弁で本濁音となる。

たとえば「カキ(柿)」は盛岡弁で「カギ」と発音される。この場合「ギ」(本濁音)の音節が高くなる。もしこれを「カ」の方を高くすると「牡蠣」になってしまう。従ってこの場合、アクセントを明示しないと、どちらか混乱する。また「ギ」を鼻濁音にして「カギ」と発音すると「鍵」になる。標準語のコタツは同様に「コダツ」とタ行が濁音化し、アクセントもここにある。

(例)「イガ(烏賊)」「サガナ(魚)」「ハダ(旗)」「ツグエ(机)」「オギル(起きる)」「ハゲ(刷毛)」「アゲル(明ける、開ける、空ける)」「イド(糸)」「イゲ(行く)」「タゴ(蛸)」

注ア、この例語の中でハゲ(刷毛)をハゲと鼻濁音にすると「禿」になる。

注イ、ハダ(旗)をハンダのように、軽く鼻濁音を入れて発音すると「膚」になる。

注ウ、アゲルをアゲルと発音すると「上げる」になる。

注エ、語中のカ行音・タ行音の濁音化は常に起こるのではなく、無声化母音や撥音、促音の後では起こらない。たとえば「サンカク(三角)」の「カ」は濁音化しない。しかしその下の「ク」は濁音化するから「サンカク」となる。「フケ(雲脂)」の「フ」は母音 ɸ が消えて、無声化が起こる。その下にくる「ケ」は「ゲ」とならず、そのまま「ケ」である。「シタ(下)」の「シ」も同様である。「ナットウ(納豆)」の「ト」も促音(ツ)の下につくので、そのままである。ただし長音は短音化から「ナット」となる。

②標準語の、語中のザ行・ダ行・バ行の本濁音は鼻濁音に近くなる。ガ行鼻濁音と違って、これらの音節を単独で鼻濁音として発音できない。しかし、語中に置かれた時、「ンザ」「ンガ」「ンバ」のように直前に「ン」が入り込む。

たとえば「ハダ(膚)」の「ダ」はその前のアの後に軽く「ン」が入り込んで「ハンダ」のよう発音される。「ハンダ」と表記するのは極端であるが、「ハ

の次に、舌先が歯茎の裏に一瞬、はつきりと触れて息を鼻の方に通す、鼻濁音化が起こっている。これを小さな「ン」で表記した方がよい。「まずこれで失礼します」などという時の「まず」は盛岡弁では「マンツ」とか「マンツ」というように、はつきり撥音の「ン」を一拍とって発音される。

「めんこい」は古語の「めぐし」の変化した言葉で、江戸時代の「めぐし」を経て、「メンゲー」「メンコイ」「メゴイ」などと発音されている。「ゲ」や「ゴ」は、鼻濁音(ゲ・ゴ)で時には「ンケ」「ンコ」のように発音されることもある。

「マド(窓)」は「マンド」と発音される。

「カベ(壁)」は「カンベ」、「カイドウ(街道)」は母音 ɸ が結合して「ケド」となり、その「ト」の直前に「ン」が入り「ケンド」となる。

「イド(井戸)」は「インド」となる。「カゼ(風風邪)」は「カンジエ」となる。「カビ(黴)」は「カンビ」となる。

「こびりつく」の「こび」は「コンビ」とはつきり三拍で発音されることが多い。

(注)語中のガ行音は、標準語と同じように盛岡弁も鼻濁音である。たとえば「ケカ(怪我)」は盛岡弁でも同様である。しかし、アクセントが違う。標準語では「ガ」が高くなるが、盛岡弁では、平板化する。

(4)係助詞「は」や格助詞「が」の子音が消失して母音 ɸ だけが残る。しかし、この ɸ は直前の音に引かれて、拗音のように軽いものとなる(一拍でなく半拍と考えることもできる)。これを表記するには「アメア、フル(雨が降る)」のようにするのが自然である。

同様にして「オメア、イゲ(お前は行け)」と「は」の母音だけが軽く残る。これらは直前の音節は母音の ɸ で、それに続けて ɸ が軽く添えられるのだが、「オラア、イガネ(私は行かない)」の場合、直前の母音 ɸ で二つ ɸ が重なるため、「オラ、イガネ」となることもあるが、強調す

るとアが表われてくる。

(5) 標準語の長音は、盛岡弁で短音化する傾向が強い。

たとえば「ガッコウ(学校)」は「ガッコ」と発音される。同様にして「シャチョ(社長)」、「トフ(豆腐)」、「フフ(夫婦)」、「テッポ(鉄砲)」である。「上手」は「ジョズ」であるが、「ジョンズ」のように軽く撥音が入ることもある。

(6) 標準語の二重母音は盛岡弁では単母音となる。

①「ハイル(入る hairu)」が「ヘル(heru)」となるように、*ai* が *e* になる。同様にして「デグ(大工)」、「モレモノ(もらい物)」、「ネ(ない)」、「イッペ(一杯)」、「イデ(痛い)」となる。

②「フトイ(hutoi 太い)」が「フテ」となるように、*oi* が *e* となる。

③「カゾエル(kazoeru 数える)」が「カジエル(kajeru)」となるように、*oe* が *e* となる。同様にして「オベル(覚える)」となる。

④「カエル(kaeru 帰る)」が「ケル(keru)」となるように、*ae* が *e* となる。

⑤「サムイ(samui 寒い)」が「サシイ(sami)」となるように、*ei* が *i* となる。(これはさらに「サシイ」と長音化することもある)

⑥「オシエル(oshieru 教える)」が「オシエル(osheru)」となるように、*oi* が *e* となる。同様にして「ケル(消える)」、「へ(稗)」、「メル(見える)」となる。

(7) 「トリカエス(取り返す)」が「トツケス」となるように、標準語では促音でないのに、盛岡弁では促音化することが多い。

たとえば「トツツグ(取りつく)」、「トツケデコ(取り替えて来い)」、「ブツカス(ぶちこわす)」、「カッチャグ(掻き裂く)」、「アツツ(熱い)」、「シャツケ(冷やこい)」、「ブツコム(ぶち込む)」、「ヒツバガス(引きはがす)」のように「り」「き」「ち」など、母音 *i* 音を含む音節が促音化している。

(8) 「フミツケル(踏みつける)」が「フンツケル」となるように、盛岡

弁では撥音化することが多い。

たとえば「ボンダス」(ほい出す)「ほう」は追うという意味の盛岡弁「ブンナゲル」(ぶち投げる)の「ち」の撥音化)「ヒンヌグ」(引き抜く)の「き」の撥音化)「ヒンマゲル」(引き曲げる)の「き」の撥音化)など母音 *i* を含む「み」「き」「ち」などという音節が撥音化することが多い。

(9) 母音 *u* が語の頭に来て、次に来る音節が両唇音の *u* の場合、鼻音の「ン」となる。たとえば「ウメ(梅)」は盛岡では「ンメ」、「ウマイ(旨い)」は「ンメ」、「ウマ(馬)」は「ンマ」とも言う。しかし「ウン(嘘)」、「ウダ(歌)」、「ウルシェ(うるさい)」のように両唇音以外の文節が続く場合、そのまま「ウ」である。お前という意味の「ウナ」は「うぬ」の変化した言葉であるが、「ウナ」とも言うが「ンナ」と鼻音になることもある。

(10) 弾音 *ɲ* の消失。

「シカラレル(叱られる)」が「スカラエル」に、「タタラレル」が「タダラエル」になるように「レ」が「エ」になる。つまり弾音 *ɲ* が消えて母音のだけ残ることがある。

(11) 半母音 *ɥ* や *ɸ* の消失。

「タヤス(絶やす)」が「テアス」に、「ユブル」が「イブル」になるように、半母音の *ɥ* や *ɸ* が消えて *u* が *i* に、逆にまた *i* が *u* に発音されることがある。

(12) 「イ」の脱落。

「カカッテイク」が「カガッテグ」に、「ヤスンデイク」が「ヤスンデグ」になるように、母音の *i* が脱落することが多い。

(受付 二〇〇四年二月一五日)